

当番町住民の意識にみる山あげ祭の変遷

福島明子*

Changes of *Yamaage-matsuri* or *Yamaage* Festival

Based on the Survey to the Residents

FUKUSHIMA Meiko

abstract

The purpose of this study is to consider the changes of attitudes towards *Yamaage-matsuri*, or *Yamaage* Festival in old six districts in Nasukarasuyama city, and its problems in the near future. The results of the survey to the residents said that *Yamaage-matsuri* had once held in the whole town for the opportunity to express belief to *Ujigami*, or gods, and for the pleasure once in a year. Results also make clear the fact that *Wakashu*, or young male successors was and is and will be the center of the festival. The residents have had a dilemma, when the festival had changed from the festival for old six districts to that of the whole town, and when it had appointed to the cultural assets of the country. That is, while the festival had had the more meanings as the assets of the whole town and the country, the only six districts had heavily shouldered its responsibilities and management. According to consolidation with neighbor town on October in 2005, the dilemma might be bigger than before. They also have other problems such as contradictions between religion and tourist attractions, holding the festival on the streets where cars are coming and going, managing to raise festival expenses where elderly households increasing, bringing up *Wakashu* in the districts where decrease the children.

Keywords : festival, *Wakashu* or young male successors, change

問題と目的

山あげ祭は、栃木県那須烏山市烏山地区において7月下旬の3日間行われている祭である。毎年持ち回りで当番町を務める泉町、鍛冶町、金井町、仲町、日野町、元田町の六町は、幕末まで烏山城下町の町人町として構成されていた町である。その後地名変更がなされ、現在は行政上は存在しないのだが、今なお通称として使用され、自治会組織および山あげ祭等においてそのまとまりが続いている（渡辺、1999）。

山あげ祭で上演される野外劇は、もともとは祭礼の付け祭（余興）であったが、観光客にとっては野外劇こそが祭として認識されている。劇の舞台は前述の旧六町内の路上である。各旧町内にある若衆座に属する若衆（青年・成人男性）らが、屋台、舞台、道具一式を解体して地車等に載せ、上演場所へ運び、組み立て、上演後は解体して次の上演場所へと運ぶ。そうした舞台道具のひとつが祭の名称の由来ともなっている山とよばれる舞台の背景である。山とは、竹に烏山特産の和紙を貼り付け、山や木、滝などの風景画を描いたものである。

キーワード：祭、若衆、変化

*平成10年度生 人間発達科学専攻（作新学院大学）

前山、中山、大山の3つから成り、最も大きい大山は高さ10メートルに及ぶ。舞台の後方百メートルほどの路上に、低い順から前山、中山、大山が並べられるため、見物人からは奥行きのある背景が配置されて見える仕組みである〔福島(2008)参照〕。

文献によると山あげ祭は時代につれ、名称、日程、式次第等において変化を遂げてきた〔烏山町歴史年表(1986)など〕。そうした変化は、住民の祭に対する意識に何らかの影響を及ぼしてきた可能性がある。長い間伝承されてきた民俗芸能の多くが過疎化、高齢化、後継者不足などの理由で途絶え、伝承されている場合でも文化財化・観光資源化により変質、変容している(小松, 1999)。たとえば宮崎県の山村に伝わる祭においても、職を求めて都市部へ移動する若者が増え、担い手が不足し始めた昭和50年代頃を境に急激に変化した様子が報告されている(福島, 2003)。さらに、祭はある時は精神的絆の核として、またある時は教育の手段として機能する(山路, 1999)など、住民にとって祭がもつ意味合いは多様であり、変化もする。したがって、山あげ祭に対する住民の意識の変化を辿ることは、昭和50年代以降に全国各地の祭でみられた変化、その背景にある要因、および今後の祭の動向を探る一端となるであろう。そこで本研究では、住民に対する質問紙調査の結果をもとに、過去、現在、そして将来の山あげ祭に対する住民の意識について検討を行った。

方法

1 調査地域

山あげ祭の当番町を務める栃木県那須烏山市烏山地区の旧六町(泉町、鍛冶町、金井町、仲町、日野町、元田町)、および比較として屋敷町。

※2005年10月に烏山町と南那須町が合併し那須烏山市となったが、質問紙調査は合併前(合併に向けて協議中)に実施された。回答に旧地名が使われている場合は、調査実施時点での旧地名で記す。同様に、屋敷町を含めた七町は旧地名であり現在の烏山地区中央1丁目などにあたるが、現在も自治会活動、祭等で使用されており、旧町内の名称を使用する。

2 調査年月

- (1) インタビュー、参与観察：2004年4月～7月
- (2) 質問紙調査：2004年11～12月

3 調査方法と手続き

- (1) 予備調査：インタビュー、参与観察

若衆経験者、現役の若衆、踊り手の師匠に対してインタビューを実施した。また祭の準備・本番の参与観察を行った。

- (2) 本調査：質問紙調査

住宅地図上でランダムに選んだ世帯に調査票と依頼状を配布し、2週間後に回収する留置法を用いた。配布数737、回収数283。ほぼ白紙のものなど無効票15は分析から除外したため有効回答数268(有効回答率36.4%)。被調査者の内訳は以下のとおりである。男性79名、女性174名、不明15。10歳代7名、20歳代10名、30歳代16名、40歳代39名、50歳代51名、60歳代58名、70歳代60名、80歳代9名、90歳代1名。不明17名。旧烏山町出身189名、旧烏山町外出身55名、不明24名。若衆経験あり103名、なし148名、不明17名。

4 調査内容

- (1) 現在：3(1)の質的データをもとに山あげ祭に対する意識を問う質問項目を作成した。回答は「6. そう思う」～「1. そう思わない」の6段階評定。
- (2) 過去：山あげ祭の思い出について自由記述で回答を求めた。何年(何歳)頃のことかも添えるよう教示した。
- (3) 将来：調査当時、隣町との合併が協議されていたことから、合併による山あげ祭への影響、山あげ祭を続けるにあたっての工夫について自由記述で回答を求めた。

結果と考察

1 現在：山あげ祭に対する意識

(1) 因子分析結果

山あげ祭への意識を問う23項目について因子分析を行った(主因子法、バリマックス回転)。第V因子で固有値が1を切ったため因子数は4とした(表1)。第I因子は「親戚や友人などと会えるのが楽しみである」「娯楽のひとつである」などから成り、山あげ祭による「賑わい・交流の促進」と名づけた。第II因子は「烏山町を代表する文化である」「烏山町独特の祭である」などから成るが、因子負荷量がマイナスであることから「旧六町の祭」と命名した。第III因子は「見どころは若衆である」「羽目はずしてよい」から成り「威勢のよい祭」、第IV因子は「見どころは劇である」「見どころはブンヌキである」から成り「見どころは劇とブンヌキ」とした(ブンヌキについては後述)。

表1 山あげ祭に対する意識・因子分析結果

全体および属性別(性別、年代、出身、若衆経験有無)に因子得点(各因子を構成する項目の平均値)を算

項目	I	II	III	IV	共通性
第I因子：賑わい・交流の促進 ($\alpha = .85$)					
山あげ祭の日に親戚や友人などと会えるのが楽しみである	.67	-.19	.27	.23	.64
山あげ祭は娯楽のひとつである	.60	-.21	.13	.23	.57
各町ごとに山や衣装、しきたり等が異なるところがおもしろい	.60	-.38	.24	.16	.57
山あげ祭は青少年育成に役立っている	.58	-.25	.32	.23	.64
山あげ祭のお囃子が好きである	.50	-.38	.38	.13	.62
第II因子：旧六町の祭 ($\alpha = .76$)					
山あげ祭は烏山町を代表する文化である	.27	-.82	.15	.25	.66
山あげ祭は烏山町独特の祭である	.20	-.67	.17	.10	.66
国の重要無形文化財なのだから国からも資金的な援助がほしい	.25	-.52	.22	.16	.57
第III因子：威勢のよい祭 ($\alpha = .69$)					
山あげ祭の見どころは若衆である	.29	-.26	.93	.16	.62
山あげ祭では羽目はずしてよい	.31	-.17	.43	.01	.54
第IV因子：見どころは劇やブンヌキ ($\alpha = .58$)					
山あげ祭の見どころは劇である	.20	-.18	.01	.64	.41
山あげ祭の見どころはブンヌキである	.13	-.10	.11	.57	.41
固有値	2.16	1.96	1.55	1.06	
寄与率 (%)	18.0	16.4	13.0	8.8	
累積寄与率 (%)	18.0	34.4	47.4	56.2	
$\alpha = .88$					

※ゴシックは因子負荷量.400以上。

※2因子以上に因子負荷量.400以上をもつ11項目は削除した。

出し、分散分析を行った(表2)。特徴的だったのは第IV因子で、性別、職業(会社員、自営業、専業主婦、定年・引退)、若衆経験により有意差がみとめられた($F(1, 229)=18.02, p<.01$; $F(3, 200)=6.47, p<.01$)。若衆の結果は後述)。女性は男性よりも見どころは劇やブンヌキであるという意識が強かった。Fisher法による多重比較の結果、自営業者は会社員、専業主婦、定年・引退者よりも、また定年・引退者は専業主婦よりも見どころは劇やブンヌキであるという意識が低かった。

表2 分散分析結果

因子	属性	N	M	SD	F	因子	属性	N	M	SD	F		
I	全体	245	4.07	1.03	.06	II	全体	245	5.28	.82			
	男性	158	4.05	1.01			男性	158	5.26	.81		.25	
	女性	73	4.01	1.10			女性	73	5.32	.82			
	10・20歳代	17	4.06	1.22			10・20歳代	17	5.12	.90		.10	
	30歳代	16	3.90	.98			30歳代	16	4.96	1.20			
	40歳代	37	3.83	1.02			40歳代	37	5.23	1.02			
	50歳代	47	4.18	.99			50歳代	47	5.44	.63			
	60歳代	52	4.04	1.18			60歳代	52	5.38	.77			
	70歳代以上	62	4.12	.97			70歳代以上	62	5.19	.73			
	会社員	41	3.80	1.14			1.18	会社員	41	5.10		1.07	1.21
	自営業	82	4.04	.94				自営業	82	5.37		.76	
	専業主婦	26	4.11	1.16				専業主婦	26	5.40		.58	
	定年・引退	55	4.19	1.01				定年・引退	55	5.27		.71	
	烏山町出身	178	4.13	1.01			2.36	烏山町出身	178	5.34		.76	2.37
烏山町外出身	49	3.87	1.05		烏山町外の出身	49	5.14	.93					
若衆経験あり	92	4.22	.98	3.61†	若衆経験あり	92	5.35	.74	.84				
若衆経験なし	140	3.96	1.06		若衆経験なし	140	5.25	.86					
III	全体	245	3.40	1.17	2.71	IV	全体	245	3.71	1.09	18.02**		
	男性	158	3.46	1.15			男性	158	3.49	1.08			
	女性	73	3.18	1.23			女性	73	4.12	1.00			
	10・20歳代	17	3.15	1.54			.15	10・20歳代	17	3.56		.92	.12
	30歳代	16	3.59	1.17				30歳代	16	3.72		1.11	
	40歳代	37	3.38	1.29				40歳代	37	3.49		1.10	
	50歳代	47	3.67	1.34				50歳代	47	3.86		1.11	
	60歳代	52	3.21	1.02				60歳代	52	3.58		1.09	
	70歳代以上	62	3.29	.96				70歳代以上	62	3.78		1.15	
	会社員	41	3.38	1.23			1.08	会社員	41	3.89		1.06	6.47**
	自営業	82	3.52	1.21				自営業	82	3.37		1.05	
	専業主婦	26	3.08	1.32				専業主婦	26	4.35		.92	
	定年・引退	55	3.32	.89				定年・引退	55	3.82		1.13	
	烏山町出身	178	3.45	1.10			.86	烏山町出身	178	3.65		1.05	1.57
烏山町外出身	49	3.28	1.37		烏山町外出身	49	3.87	1.18					
若衆経験あり	92	3.63	1.20	6.68*	若衆経験あり	92	3.30	1.03	22.67**				
若衆経験なし	140	3.22	1.14		若衆経験なし	140	3.96	1.05					

※1 ** $p < .01$ * $p < .05$ † $p < .10$

※2 属性不明の被調査者がいるため、また被調査者数が小数の群は分析から除外したため、各群の合計人数 = 全体の人数とはならない。

属性で特徴的だったのは若衆経験であった。第III因子と第IV因子で有意 ($F(1, 230) = 6.68, p < .05$; $F(1, 230) = 22.67, p < .01$)、第I因子で有意傾向にあった ($F(1, 230) = 3.61, p < .10$)。若衆経験者はそうでない人に比べ、威勢のよい祭であるという意識が有意に強く、劇やブンヌキであるという意識が有意に低く、賑わいや交流を

もたらずという意識が強い傾向にあった。いずれの因子においても年代、出身地による有意差はなかった。

山あげ祭の野外劇は、若衆が組み立てる大がかりな舞台で、時代劇の衣裳を纏った女性の踊り手たちにより演じられる。またブンヌキでは、旧六町の屋台が一堂に会し、若衆たちが勇ましいかけ声とともに太鼓の腕や力強さを競う〔福島(2008)参照〕。第IV因子の意識が強い人たちは、こうした野外劇やブンヌキの華やかさに魅力を感じているといえる。一方、若衆経験者は、威勢のよい祭という意識や祭により賑わいや交流がもたらされるという意識が強かった。若衆経験者、男性、自営業者(とりわけ若衆経験者)は祭によって生み出される賑わい・交流や威勢の良さに山あげ祭の神髄を見いだしており、祭への自我関与の強さがこうした意識となって表れているのかもしれない。

2 過去：山あげ祭の思い出

99名から山あげ祭の思い出が寄せられた。1人の回答に複数のテーマが含まれている場合は独立してカウントしたところ回答数は148にのぼった。これらはテーマ別に以下のように分類された(カッコは回答数。図1、表3参照)。**①若衆(35)**、**②劇・踊り手(17)**、**③年に一度の楽しみ(13)**、**④賑わい・交流(13)**、**⑤山(12)**、**⑥由来・名称・日程・進行(10)**、**⑦露店(9)**、**⑧運営(5)**、**⑨家族(5)**、**⑩御神輿(4)**、**⑪観光(4)**、**⑫関心なし(3)**、**⑬常磐津(3)**、**⑭ブンヌキ(2)**、**⑮戦争の影響(2)**、**⑯すばらしかった(2)**、**⑰その他(9)**。これらは8つに集約された。(1)若衆の迫力(①⑨)、(2)スケールの大きさ(①②④⑤⑥⑦⑩⑭)、(3)町をあげての年に一度の楽しみ(③④⑧)、(4)劇・踊り手の変化(②)、(5)夜店めぐり(⑦)、(6)祭や担い手の精神的変化(①⑩⑪⑰)。(1)～(6)それぞれについて詳しくみていく。

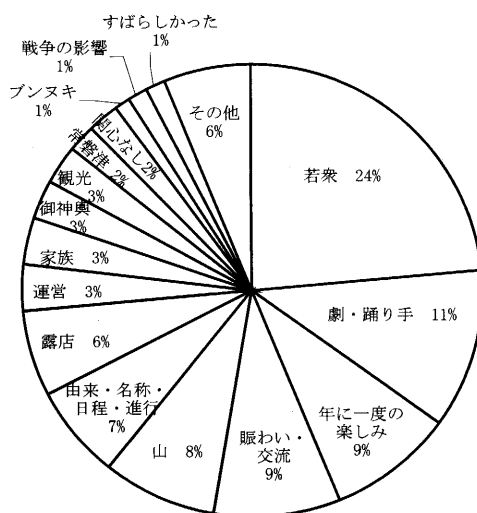


図1 山あげ祭の思い出

(1) 若衆の迫力

「日本一の野外劇」と銘打つ山あげ祭だが、住民の劇や踊り手に関する思い出は若衆のその半数にも満たなかった。全回答の約4分の1を①若衆に関する思い出が占め、住民の関心の多くは舞台を組み立てるといふ、観光客から見れば「裏方」に注がれているといえる。舞台上で華やかに演じる若い踊り手が表舞台の主演なら、炎天下のなか統一された法被姿、団体行動で舞台を支える若衆は裏舞台の主演であろう。

若衆の思い出の中で最も目立ったのは、「格好良くきびきびした態度」〔被調査者NO12(以下NO12と表記)、62歳・性別不明〕「志気と機敏さ、無駄のない行動」(NO20、75歳男性)、「荒かった」(NO102、53歳男性)、「筋肉質で頼もしかった」(NO205、78歳女性)など昔の若衆を懐かしむ表現だった。以下の回答からは、きびきびと山を運び、あげる若衆たちの姿が思い浮かぶ。「地車は手で引いて山揚げ。全部地車に積んだので重く、舗装などになっていないので石だらけ。各町内移動が一番大変でした。その為若衆も頭の毛の染めた弱々しい者は1人もいなく全員一致で力を出し合ったものです」(NO89、83歳男性)。対照的に現在の若衆について

は、「結束力と品位にかける」(NO9、54歳男性)、「おとなしい」(NO18、61歳男性)、「体力がない人が多く、最終日等は元気がなくなる」(NO101、男性、年齢不明)などにべもない。「昨今の作業だらしくまるで見て居れません」(NO20、75歳男性)、「昔を知っている者にとってつまらないので見に行かなくなっている」(NO41、85歳男性)など手厳しい意見もあった。

若衆の印象が変化した理由の1つに若衆の減少がある。表3、表4によると祭には相当数の若衆が必要とされるが、世帯数減少、少子高齢化により人員確保に苦勞し、アルバイトで補っている状況である。それに対し以前は「世帯数が多く、若衆もセレクトできる状況で、勤め人等については俗に云う『お呼びで無い』」(NO189、79歳男性)、「若衆に入りたけれど入れない人もいた」(NO90、38歳男性)。誰でも若衆になれるわけではなかったことも志気を高める要因だったのではないだろうか。

もうひとつの理由として、「昭和20年代は上下関係が非常にきびしかった」(NO112、76歳男性)とあるように、若衆座の規律の厳しさがあげられよう。かつては「先輩から後輩へ指導され、しきたりからノウハウまで伝授引き継がれて、祭をとおして後継者、リーダー作りにもつながった」(NO4、年齢性別不明)、「社会的常識的な事、上下関係のつきあい方等を通じて大人になっていった」(NO82、69歳男性)という。

選ばれし者という誇り、若衆座の規律の厳しさが、「山あげ行事を取りしきる当番町の世話人を頂点とした若衆組織は絶対的であり、祭の主役」(NO92、43歳男性)との気概につながっていたと考えられる。

(2) スケールの大きさ

回答によると、山、見物人、露店、祭りにかける意気込み、式次第、賑わいなどいろいろな意味で、かつての方がスケールが大きかったという。特に山については、「今より大きかった。大山の滝はお米を流したり、水を流したり迫力があつた」(NO94、年齢性別不明)など、規模や仕掛けが大がかりであったという記述が目立った。スケールが小さくなった要因として、「昔は車の通りも少なく、電線が邪魔になるようなこともなかったので、道路幅いっぱいを使って山をあげることができた。山に人が何人もものっている写真が残っている。今は行き先案内看板や道路標識が邪魔になり、自由に山をあげることができなくなった。交通規制の関係で、警察の意見、指導を聞かなければならなくなった」(NO59、45歳男性)とあるように、道路や交通事情、電線の問題があげられる。未舗装だけに山をあげるとも運ぶのも力仕事であり、それゆえに若衆の迫力が増したといえよう。

また、「当番町になった自治会は会所(準備をする場所)に連日若衆が集まり、祭りの準備を春頃から始めた」(NO82、69歳男性)、「みこしが12時すぎ1時ごろ宮入りしてから最後の余興が始まり、1時間40分興行であった。よって後かたづけして自宅に帰るころは東の空が明るくなって日の出と共に家に入った。現在は時間交通の便により40分と短縮されるようになってしまった」(NO21、73歳男性)など、準備や式次第の簡略化も祭のスケールが小さくなったと感じる要因であることがわかる。ブンヌキについても、「50年前位の山あげ祭について。身動きも出来ないほどの人が集まり、その躍動感の中に歓声を挙げて喜び合ったものでした」(NO68、76歳女性)など強い印象を残していた。

(3) 年に一度の楽しみ

60歳代以上で目立ったのが「楽しみや娯楽などの乏しさからか祭り囃子に心浮き立ち町中を走りまわったものだった」(NO10、70歳男性)、「どこの家でも客を招待し、家中で喜び楽しみました。当番町になるとお揃えを作り、よろこんで相応の寄付をし、無事にお祭りが終わる事を神に祈りました」(NO47、77歳男性)等々、山あげ祭が年に一度の楽しみだったという回答であった。旧六町内だけでなく、近隣に住む人たちにとっても同様であったようで、以下の回答は、娯楽が少なく質素な暮らしのなかで祭りをいかに楽しみにしていたかを生き生きと伝えている。「今のような農機具が無く全部手作業のため、農家に育った子どもは、お祭りまでに田の草取り、葉たばこ取り、たばこはさみ、畑仕事と全部農家の労働力として当てにされていました。お手伝いをして、お小遣いを頂いて山あげ祭に約5km歩いて、新しい夏の洋服を着て出かけ、アイスキャンデーをなめながら山あげ祭を見たのです。村には一台も車はなかった時代で、舞台にマイクもスピーカーも無く、遠くから踊り子の姿を見るだけでも、テレビの無い時代の子供もたちは幸せでした」(NO2、69歳女性)。また以下の回答にあるように公的機関をも巻き込んで生活が祭中心にまわっていたという。「昭和30年前半までは山あげ祭はすべてに優先する感があった。当時街中を通っていた国鉄バス、東野バスも祭礼期間中は迂回運行

をしていた」(N0189、79歳男性)。

(4) 劇・踊り手の変化

若衆の次に多かったテーマが劇・踊り手に関する回答で、そのほとんどが、踊り手や劇の変化に言及していた。回答によると、以前は大宮、笠間、東京など他地域からプロの「踊り子」を雇っていた。現在では地元の子どもたちが劇を担っている。予備調査で行ったインタビューによると、昭和54(1979)年、国の重要無形民俗文化財に指定されたのを機に烏山町内で踊り手を育成しようという動きが起こり、山あげ保存会のなかに踊り手部と常磐津部から成る芸能育成部が創設された。踊り手部には幼稚園から社会人まで18名が所属し、毎週土曜、祝日、夏休み等を使って練習を行っている。こうした変化に対し、「現在、町内にて育成し、すばらし

表3 山あげ祭の思い出

テーマ	回答数	回答例(抜粋)
①若衆	35	自治会の長老や先輩達との会話の中で若い者は社会的常識的な事、上下関係のつきあい方等を通じて大人になっていった(酒の飲み方、異性とのつきあい方も含めて)と思われます。近所づきあいの大切さを学んだ(N082、69歳男性、若衆経験者)。
		地車は手で引いて山揚げ。道具は全部地車に積んだので重く、道路も舗装などないで石だらけ。各町内移動が1番大変でした。今の祭りは当時の労力の半分の員数でやっている様な気がして、私にはものたりない様な気がします。これも時代ですかね!(N089、83歳男性)
		祭行事の若衆の動員については当金井町地区は当時から世帯数が多く、若衆もセレクトできる状況で、勤め人等については俗に云う「お呼びが無い」ため祭行事への参加は幸か不幸か無い時間も経過してきた(N0189、79歳男性)。
②劇・踊り手	17	昔は山を搦くのもおどり子もプロでしたが、今は町内のアマですね。だから見ていて迫力が無く、昔を知っている者にとってつまらないので見に行かなくなっている(N041、85歳男性)。
		踊り子さんについては、現在、町内にて育成し、すばらしい踊り手がありますが、以前は宇都宮、下館の方よりプロの踊り子さんを毎年その地を訪問しお願いし祭典中来ていただいたのです(N071、73歳男性、若衆経験者)。
③年に一度の楽しみ	13	昔は楽しみが少なく、お祭りは唯一の年中行事でどこの家でも客を招待し、家中で喜び楽しみました。当番町になるとお揃えを作り、よろこんで相応の寄付をし、無事にお祭りが終わる事を神に祈りました(N047、77歳男性)。
		昭和30年前半までは山あげ祭はすべてに優先する感があった。当時街中を通っていた国鉄バス、東野バスも祭礼期間中は迂回運行をしていた。当時の露大商も街の大通りを占拠し地元商店も黙認せざるを得ない状況であった。当時私達の組は8軒で、すべて老夫婦が健在で戸主として支配し、隣家ではお祭になるとお雛子のテープを一日中かけっぱなしで廻っていたが、近隣からの苦情トラブルも無い状況であった(N0189、79歳男性)。
④賑わい・交流	13	母が新しい浴衣を作ってくれ、それを着て山あげ祭中夜店に行くのが好きで長い長い夜店の列の中を歩くのですが、それはすごい人の数で、肩をぶつけ合ったり、人の足をふんでしまったりと大変疲れる思いで、足が疲れて痛くなるけど、にぎやかでとても楽しい思い出です(N0114、45歳女性)。
		昭和40年頃(10才)、他町(南那須町、小川町など)の人達も楽しみにして、親類の子ども達もおめかしをして泊まりがけで見に来た。歩道がなかったのも、露天商が町の大通りに店を出し、にぎやかだった。車も少なかったのも、のんびりしていた。当番町になると、ごちそう(赤飯、きんぴらごぼう、煮しめ)をつくるお客の買い物で、商店は忙しかった。(N0211、48歳女性)。
⑤山	12	昔は車の通りも少なく、電線が邪魔になるようなこともなかったのも、道路幅いっぱいを使って山をあげることができた。山に人が何人もものっている写真が残っている。当番町だけでなく、付祭りとして当番町以外でも自由に山をあげて踊りを踊った。全町山をあげたこともあると聞いたこともある。今は行き先案内看板や道路標識が邪魔になり、自由に山をあげることができなくなった。交通規制の関係で、警察の意見、指導を聞かなければならなくなった(N059、45歳男性、若衆経験者)。
⑥由来・名称・日程・進行	10	昭和30年代は天王祭りという八雲神社の祭礼であった。その余興が現在の山あげ祭りとなった。私が30代の頃は22日最後にもこしが12時すぎ1時ごろ宮入りしてから最後の余興が始まり、1時間40分興行であった。よって後かたづけして自宅に帰るころは東の空が明るくなって日の出と共に家に入った。現在は時間交通の便により40分と短縮されるようになってしまった。昭和40年後半より余興の山あげ祭が主になってしまったので、我々の年代の者はつまらないと思う(N021、73歳男性、若衆経験者)。
⑦露店	9	子どもの頃(～中学生くらい)お祭りといえは夜店に行く事で、山あげはほとんど観なかった。山あげを観たのは大人になってから。町中で山を運ぶ車やおはやしの移動などを見ている方が、子どもにとっては楽しくお祭りらしかった。ゆかたを着せてもらったり来客におこづかいを頂ける事がうれしかった(N0184、41歳女性)。
⑧運営	5	戦前は山あげ祭りが町の行事、商店会、町内の行事として定着し、町を挙げての会であったが、戦後大型店の出店(町商店の経済的さびれ)、夜店等で祭りに要する経費は各商店、家庭の寄付、負担等によってまかなわれる(N027、78歳男性、若衆経験者)。
⑨家族	5	小学生の頃、夏休みに山あげ祭を見に行き、活躍する祖父の姿が誇らしかった。昔はブンヌキは一度だけだった(N017、22歳女性)。
⑩御神輿	4	思い出すのはみこしを「もむ」のですが、当時は警察に押し込んだり、二階(みこしより上)から見ていると母にしかられた思い出があります。現在はそういう事も無い様です(N0254、64歳男性)。
⑪観光	4	本来八雲神社の祭礼で奉納行事であったが、観光化との調整が必要。観光材とした場合、当町観光客への接遇について一考すべき所が多い(N027、78歳男性、若衆経験者)。
		昔は民俗行事として誇りを持って行われていたが、昭和40年代半以降は観光行事化して対抗意識が薄れてきた。自腹を切っても山あげ祭りをやってきたが、今は依存心や金銭感覚が強く、反面祭り本来の姿が失われている(N053、71歳男性、若衆経験者)。
⑫関心なし	3	主人はお祭りに参加しますが、私は全然無関心です。烏山町に住んで一度もお祭を見た事はありません(N062、54歳女性)。
⑬常磐津	3	お雛子だけはとてもいいなあと思う。踊りはわからないけど、笛、太鼓は祭りの中で私の一番の楽しみです(N0211、48歳女性)。
⑭ブンヌキ	2	50年前位の山あげ祭について。現在、役場があるところは八雲公園で、役場は今消防署があるところであり、ブンヌキはその広場(八雲神社の鳥居の前)で行われ、身動きも出来ないほどの人が集まり、その躍動感の中に歓声を挙げて喜び合ったものでした(N068、76歳女性)。
⑮戦争の影響	2	昭和12年に日中戦争が始まり、物資を大切にすることを始め必勝の念から山あげの姿が縮小する。昭和14年以降は山をあげることは中止となった(屋台のみ)。昭和18～20年は屋台も出さない。戦後昭和22年に屋台のみの祭礼。昭和23年頃より屋形程度を背景とする行事となる。その後、大山とか中山の一基があがる程度。昭和25年頃よりすべての山があがるようになる。但し、質素第一主義(N053、71歳男性、若衆経験者)。
⑯すばらしかった	2	過去の事象については、何事も良き思い出が映像として残るものであるが、こと山あげ祭に関しては違う。過去を語るとき、本当にすばらしかったの一語に尽きる(N0260、78歳男性、若衆経験者)。
⑰その他	9	子どもの頃から山あげ祭に親しみ、40代まで他のお祭りを見たことがないくらいです。40を過ぎて当町で行う祭りと他町との違いが分かり、非常に大変な事、伝承すべき事であると思う(N015、55歳男性、若衆経験者)。

い踊り手がおります」(NO71、73歳男性)と評価する人がいる一方で、「見ていて迫力が無く、昔を知っている者にとってつまらない」(NO41、85歳男性)、「地元子ども達が踊るようになってからは演目も減り、踊りもへたになった」(NO59、45歳男性)との批評もきかれた。

(5) 夜店めぐり

昔ならでの思い出が夜店めぐりに関するそれであった。「子どもの頃、お祭りといえば夜店に行く事で、山あげはほとんど観なかった」(NO184、41歳女性)、「芝居を見るよりも食べ歩きに夢中になっていた」(NO228、40歳女性)など、若衆や劇よりも楽しみにしていた人もいた。その他、夜店の数が多かった、昼間も出店していたという回答もあり、露店も祭を盛り上げる役割を果たしていたことがわかる。

(6) 祭や担い手の精神的変化

「昔は民俗行事として誇りを持って行われていた」(NO53、71歳男性)、「よろこんで相応の寄付をし、無事にお祭りが終わる事を神に祈りました。世代が変わり神に対する尊敬の念もうすれ、祭りに対する考え方も変わりました」(NO47、77歳男性)など、祭の精神に踏み込んだ回答もあった。それを反映しているのが御神輿にまつわるエピソードで、「御神輿は神を敬う念厚く、高所から見物できず、洗濯物も見える所へは干せなかった」(NO205、78歳女性)といい、もし高い所から見下ろすものなら「その家へ御輿がもみ込んだ」(NO169、75歳男性)という。

71歳男性(NO53)によると戦時中の昭和14年以降も屋台を出し、昭和18～20年は山も屋台も出さなかったが、昭和22年に屋台を出し、昭和23年頃からは祭が復活、昭和25年頃からはすべての山があがるようになったという。戦時中、終戦後の食べていくのもままならず規制が強かった時代に屋台だけでも出そうとしたことに旧六町にとっての山あげ祭の意味が表れているといえよう。

3. 将来：山あげ祭のこれから

合併による影響も含め、山あげ祭の今後に関して書かれた回答をまとめて分析した。複数のテーマについて論じた内容もあり、101名の被調査者から得られた回答内容は204に及んだ。それらは10のテーマに分類された(カッコは回答数。図2、表4参照)。**①経費(35)**、**②担い手(34)**、**③当番町制(29)**、**④観光・PR・経済効果(20)**、**⑤運営法(当番町以外)(19)**、**⑥変化なし(17)**、**⑦合併先との協力(16)**、**⑧祭に対する意識(9)**、**⑨内容(7)**、**⑩マナー(2)**、**⑪その他(16)**。

①経費、**②担い手**、**③当番町制**の3テーマで全回答の約半数を占めた。当番町制以外の運営法や祭自体の内容についての提案(**⑤⑧**)も含めると、6割が何らかの変化を求めている。また**④⑦**のように、合併後のあり方について書かれた回答も少なくなかった。11のテーマは以下のように集約された。(1)最大の問題点は経費、担い手不足、当番町制(**①②③**) (2)運営法(当番町制以外)や内容の見直し(**⑤⑧**) (3)合併による影響(**④⑥⑦**) (4)観光資源としての活用(**④**) (5)意識・マナー向上の必要性(**⑨⑩**) (6)競争・対立(**②③⑪**)。 (7)その他(**⑪**) (1)～(7)について詳しくみていく。

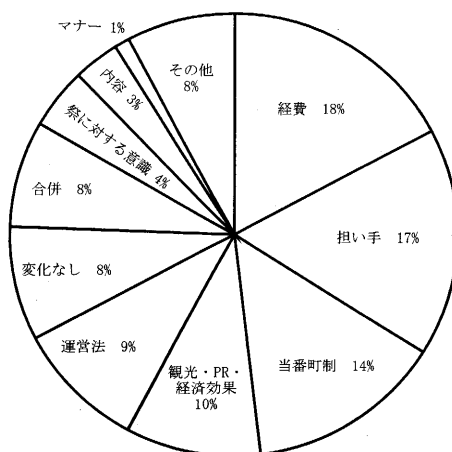


図2 今後の山あげ祭

(1) 最大の問題点は経費、担い手不足、当番町制

テーマ①②③で全回答の約半数を占め、経費、担い手不足、当番町制は住民のもっとも大きな関心事であることがわかった。根底に少子高齢化、旧六町の世帯数の減少があることからこの3つは不可分である。

①経費については、行政からより多くの予算を求める意見が目立った。各町内で独自に募っている寄付に対しては、負担感を訴える回答のほか、「粗品ぐらい用意すれば次の祭の寄付も考えようもある」(NO264、42歳男性)、「慣習的なムダをなくしてクリーンな会計にし、決算報告もすべきではないでしょうか」(NO184、41歳女性)等の批判もあった。

②担い手不足については「絶対人数100名ぐらいをいかに集めるかが問題である」(NO31、85歳男性)という。それに対する打開策は主に以下の3つであった。(a) 高校生の参加、(b) 他の町内の若衆の応援、(c) 旧六町以外からも希望者を募る。(a) に関しては「部活や学校行事を中止にし、山あげ祭に参加することをすすめるべき」(NO44、28歳男性)など学校との連携を希望する声がある一方で、「高校生ではひ弱」(NO4、年齢性別不明)との意見もあった。(d) 若衆の年齢を引き上げて人数を確保する(NO47、77歳男性)という少数意見もあった。

経費・人手不足の危機意識から③当番制の見直しを求める意見が出てくるわけである。とりわけ「金井町のように千軒以上の町と、仲町のように65軒前後の町で同じ祭を行うのはかなりの犠牲を強いている」(NO178、62歳男性)とあるように、世帯数の少ない旧六町の住民には人的・経済的不公平感が強い。現在の当番制の代替案として以下のような提案がなされた。(a) 旧六町の町内が協力して、または合同で当番を務める。(b) 旧六町全体で行う。(c) 旧六町以外からも若衆を募集する。(d) 烏山町(現・烏山地区)全体で行う。(e) 合併する町も含めた新市(現・那須烏山市)全体で行う。

経費や人手不足を憂え、旧六町による持ち回りが限界に近づきつつあるという認識は共通しているにもかかわらず、当番制見直しが具体化しない背景には、旧六町全体の当番町として誇り、各当番町の誇り、そして他の当番町との競い合いの心理が働いていると考えられる。

(2) 運営法や内容の見直し

当番制以外の運営法の見直し、および内容の見直しを求める意見も寄せられた。特に目立ったのが「交通量の多い道路を規制してまで行う必要があるのか」(NO5、47歳男性)、「温暖化による道路の暑さ」(NO13、67歳男性)など交通・道路事情に絡む意見であった。路上で行う方法に代わり、「広場で1日3回行うのが良い」(NO85、64歳男性)など広い場所で固定して行うという意見もあった。この方法は、当番町が他町を訪問して「御庭を拝借」し、山や舞台を組み立てて劇を行い、終わったら解体して次に移動するという山あげ祭の根底を揺るがす方法といえよう。なお⑤運営法に関する意見のなかで現在の方法を積極的に支持したのは、「警察は交通第一主義なので祭がしやすい環境を作ってほしい。たとえば夜間は町内全体車両進入禁止にするとか」(NO87、43歳男性)の1名にとどまった。

⑧祭自体の内容の見直しで印象的だったのは、「『だれもが気軽に参加して楽しめる祭のあり方』など検討してもよいと思う」(NO10、70歳男性)など広く住民が楽しめる催し物の導入を求める意見であった。こうした意見が出る背景には、「当番町や一部若衆だけが祭は自分たちのものという意識が強く、それ以外の人間は『今本当に祭期間中なの?』と首をかしげたくくなるような印象を毎年、受けます」(NO157、40歳女性)など、祭に関与できない人たちの「部外者」意識がありそうだ。

(3) 合併による影響

調査当時協議されていた隣町との合併による影響については、前向きにとらえる意見と、あまり大きな影響はないという意見の2つに分かれた。前者は、合併相手の那須町のいかんべ祭りとともに山あげ祭を盛り上げたいという内容である。④観光・PR・経済効果に分類された回答から引く。「合併後は両町の観光資源を同時に宣伝することが大切かと思われます」(NO16、66歳男性)、「東北三大祭りのごとく日本中からの観光客をお招きした夢を抱いています。いかんべ祭りを同日ではなく連日にし、ホテル、旅館に客を送りこみたい」(NO205、78歳女性)。

あまり大きな影響はないという意見は、⑥変化なしの中に見いだせる。ここでも「それぞれの町の祭りをいっそう大切に」(NO47、77歳男性)といかんべ祭りととの共存共栄を前提にした意見が目立った。「観光客が

福島 当番町住民の意識にみる山あげ祭の変遷

表4 今後の山あげ祭

テーマ	回答数	回答例(抜粋)
①経費	35	当番町になると個人的な負担が大きい町と小さな町では3倍差があり、金銭的不公平感が強い。改善できればみんなが楽しめるお祭になるかもしれません (NO13、67歳男性、若衆経験者)。
		町は自治会交付金を200万円減額し、国・県・町も修繕費の交付金制度を廃止。個人負担金が増え、祭り当番が廻ってくると自治会を脱会する家庭が増える (NO81、78歳男性、若衆経験者)。
		町内の人数が少なくとか年老いている場合等は1家に1人は出なければならぬ、人を頼んで迄出なくてはならない(1日5,000円以上は支払わなければならない)。とても大変である。又町によっては揃いのゆかたや半纏等を作って、頼んだ人に着せるようです (NO141、74歳男性、若衆経験者)。
		町民各戸から多額の寄付が自治会を通じて行われているが、批判があることも事実である。町村合併を控えて、祭の改革をいろんな角度から検討する必要があると思う (NO148、78歳男性)。
		独居老人で払えない方も多。慣習的なムダな支出をなくし、公的援助を求めて決算報告もすべきではないか (NO184、41歳女性)。
②担い手	34	若衆も人不足。高校生のアルバイトではひ弱 (NO4、年齢性別不明)。
		当番町の若衆が不足するので絶対人数100名位をいかに集めるかが問題である (NO31、85歳男性)。
		小・中・高校生の参加が少ない。部活や学校行事を中止にし、山あげ祭に参加する事をすすめるべきです (NO44、28歳男性、若衆経験者)。
		役の世話人、中老が若すぎるから、年齢を引き上げて若衆の数を増やす (NO47、77歳男性)。
		インターネット等も利用して地元以外からも人集めをしては? 烏山出身の子供達を年に一度呼び戻しては? (NO82、69歳男性、若衆経験者)
③当番町制	29	六町が当番で祭を主催するが、人材は広く集め、参加者、見物人ともに楽しくなる様工夫するとよいのではないかと (NO15、55歳男性)。
		当番制は小さな自治会では困難になってくると思うので(費用、人不足)、全体で募集制で行えば良いのでは。そうすれば合併した町、当番制に入っていない人も参加出来る (NO132、70歳女性)。
		小さな町での当番はむずかしくなるので友好協定の地区を作る。祭り好きの人もいると思うので、当番町以外の地区に協力を求める。合併後は全市の祭にして頂きたい (NO151、53歳男性)。
④観光・PR・経済効果	20	常磐津など今の若い人には判らないので、わかりやすいパンフレットなど必要 (NO4、年齢性別不明)。
		観光席の設置に工夫を要する。陽覆いをかけるとか、もっと腰掛けを増やすとか (NO34、74歳男性)。
		合併後は観光客が分散しそうなのが悩みです (NO182、22歳女性)。
		合併後は心を1つにして盛り上げ、東北三大祭りのごとく日本中からの観光客をお招きしたい夢を抱いています。いかんべ祭りを同日でなく連日にし、ホテル、旅館に客を送りこみたい (NO205、78歳女性)。
⑤運営法	19	西町の広場や校庭を借りるのも一つの方法。現在のように道路で行うのは、せめて1日1回ぐらいが交通事情を考えると望ましいと思います。400年前は自動車が無かったですから (NO2、69歳女性)。
		伝統を守りつつ制度・運営を変えていかないと地域社会と結びついた行事にならない。原点に戻り、みんなが楽しめるものにするか、先祖伝来の宗教行事として保存するのか方向づけ見直しが必要。人口減や高齢化で町内会組織がくずれ、またサラリーマンには参加しにくい。「よさこいソーラン祭」のようにオープン参加型の祭りを欲している (NO4、年齢性別不明)。
		車社会時代の道路で行う問題。温暖化による道路の暑さ (NO13、67歳男性、若衆経験者)。
		旧町は現在は存在しないわけであり、特に町村合併となれば、運営体制の改善はさけて通れないと思う (NO24、67歳男性)。
		警察は交通第一主義なのでもっと祭りがしやすい環境を作ってほしい。夜間は町内全体車両進入禁止にするとか (NO87、43歳男性)。
		山あげ祭は烏山の誇りですが問題はあります。古い考え、体質を捨て、守るべきものは守り、ニュー山あげ祭ができれば良い。このアンケートで少しでも変わる事を望みます (NO157、40歳女性)。
⑥変化なし	17	民俗行事として続けるのか、観光行事として続けるのかで考えに差が出てくる。「古来のやり方」で続けていった方が、むしろ見る人をして喜ばせるのではないだろうか (NO53、71歳男性、若衆経験者)。
		現在近隣が希薄な状況である。お祭りを通した地域活性は重大な役割を担っており、大切な文化である (NO229、55歳男性)。
		他町の若衆と一緒に祭りをやるというのはありえない話。他町に負けたくないという考えがあるからこそ、祭りが成り立っていると思う (NO246、35歳男性、若衆経験者)。
⑦合併先との協力	16	各町にはそれぞれの伝統的な祭り行事があると思います。よく相談し互いに協力できる事については(人手などの手伝いも)話し合いたい。具体的にはいい案が出ない (NO71、73歳男性、若衆経験者)。
		それぞれの町の誇りである文化をお互い大切にしたい協力をおしまず、もりあげていくことも青少年育成に役立つことでもあると思う (NO114、45歳女性)。
⑧祭に対する意識	9	郷土の伝統文化についての教育も必要である (NO4、年齢性別不明)。
		450年前からの伝統ある祭ゆえに継承してゆくのも我々現代人の責任であり将来に引き継いでゆく心構えが大切だ (NO13、76歳男性、若衆経験者)。
		現実には6自治会以外の自治会からの応援もある。が、「オラが村魂」が強く、合併後に六町制を増加させた場合受け入れる事ができるのか。余計な金をかけず、人を素直に受け入れることがソフト的な課題でしょうか (NO242、32歳男性、若衆経験者)。
⑨内容	7	統一した新たなイベント・祭にする(オープンイベント)。旧町の祭りの内容を文化的尊重し継ぎながら (NO4、年齢性別不明)。
		合併を機会に町民の総意を確かめ、「だれもが気軽に参加して楽しめる祭りのあり方」など検討してもよいと思う。伝統の継承と若者達の感性を生かした新しい祭りが両立できると良いのだが (NO10、70歳男性)。
		寄付だけ取って、当番町や一部若衆だけが祭は自分達のものという意識が強く、それ以外の人間は「今本当に祭り期間中なの?」と首をかきげなくなるような印象を毎年、受けます。住民1人1人が「今は祭りなんだ!」という気分させてくれる山あげ祭を期待しています (NO157、40歳女性)。
⑩マナー	2	警察の世話になることが増えている。ハメをはずすのは仕方ないがモラルやルールを守ってほしい (NO186、28歳女性)。
		山を解体して次の場所に移動する際に、若衆が飲み食いしたゴミを置き去りにするので大変迷惑している (NO264、42歳男性)。
⑪その他	16	祭の好きな人とそうでない人の多少の対立が一般的な生活にも関わっています (NO13、67歳男性、若衆経験者)。
		神社にも問題は多い。苦勞、出金を減らすため当番町を使う。当番がまわってくると神社の宗教行事が増えている (NO77、49歳、若衆経験者)。
		「山あげ会館」はすばらしい建物と内容です。烏山出身で、烏山に愛着を持っている人達が全国に相当数いると思います。その子供達にふるりの良さを見せる機会を是非共につけてほしい。行政面のバックアップで、山あげ祭を通して「ふる里造り」の長期的プランを作ってほしい。合併後は田舎の良さをお互い出し合って伝統芸能を孫の孫の代まで続けてほしい (NO82、69歳男性、若衆経験者)。
		旧六町にある6台の屋台(山車)の県の文化財指定を得るべく申請を急ぐべきである。屋台は各町の財産である (NO260、78歳男性、若衆経験者)。
		部外者として山あげ祭に触れ、自分も何か手伝えればよいとは思っていますが、仕事の関係で時間が取れず、地域の人たちにとけ込む難しさで、結局見るだけになってしまいます (NO261、32歳女性)。

分散しそうなのが悩み」(NO182、22歳女性)という回答はあったものの、合併による深刻、否定的な影響について述べた回答はなかった。

(4) 観光資源としての活用

山あげ祭を観光資源として活用したいという意見が約1割を占めた。具体的には、テントを張る、椅子席を増やす、パンフレットを用意する、観光客に合わせて日程や上演時間を組むなど観光客への配慮を求めたり、宣伝に力を入れるという意見であった。一方で、観光に力を入れるあまり伝統が損なわれていると憂える回答もあった。「ふだんあまり知られていない小さな小さな町が、他県の人々からも着目してもらえる素晴らしい機会になっている事は確かだと思います」(NO228、40歳女性)といった山あげ祭に対する誇りが、観光に力を入れる、観光に力を入れると伝統が損なわれる、という両極端の意見に表れているようだ。次に後者についてみていく。

(5) 意識・マナー向上の必要性

住民の意識・マナーを高める必要性を説く回答の多くは祭りの精神にまで踏み込んでいた。「郷土の伝統文化についての教育も必要である」(NO4、年齢性別不明)、「お祭は神社の祭礼の余興であり、主は神社の祭礼であることを忘れないこと」(NO41、85歳男性)、「450年前からの伝統ある祭ゆえに継承してゆくのも我々現代人の責任であり将来に引き継いでゆく心構えが大切だ」(NO131、76歳男性)。その他、ゴミ問題などモラルを正す回答もあった。

(6) 競争・対立

山あげ祭において競争や対立があると指摘する回答もあった。ひとつは旧六町間の競い合いであるが、もっと深刻なのは「祭の反省や意見を住民が述べるチャンスはほとんど無い。飲み屋などで世話人や若衆に個人的に言っても、頑固なまでに聞く耳を持たない。古き良きものは残すべきだと思うが、その時代の住民の声に耳を傾ける気持ちは必要なのではないか」(NO264、42歳男性)など祭の主導者とそうでない人たちの対立で、「祭の好きな人とそうでない人との多少の対立が一般的な生活にも関わって居ます」(NO13、67歳男性)という。

(7) その他

夜店を一カ所に集めず旧六町内に分散してほしい、山あげ会館を拠点に他県等に住む烏山出身者の子どもたちによる伝統芸能継承に取り組んでほしい、六町内の屋台を県の文化財に指定する申請をしてほしいなど多様な意見が寄せられた。

まとめ

本調査の結果、かつて山あげ祭は旧町内の祭として、神への信仰を表現する機会として、また年に一度の楽しみとして、町をあげて行われていた祭であったことが改めて示された。そして過去も現在も未来も、山あげ祭においては若衆がその要であることが浮き彫りにされた。とりわけかつての祭を知る人たちの脳裏には、若衆らがきびきびとした動作で重い地車を引き、大きな山をあげ、荒々しく御神輿を「もんでいた」様子が焼き付いていることが伺われた。

時代は移り、旧町内の祭だった天王祭は烏山町の山あげ祭として国の重要無形民俗文化財に指定され、舗装された道路には自家用車が行き交い、町内の若者は減少した。本調査の結果から、旧六町の祭から烏山町の祭へ、そして国の文化財となっていったがゆえにジレンマも抱え込むことになったことがわかる。烏山町や国の文化財としての意味合いが増す一方で、運営自体は依然として旧六町が担い、少子高齢化のなか旧六町に人的・経済的負担が重くのしかかっているからである。調査後の2005年10月には隣町と合併し行政規模が拡大した分、ジレンマはさらに大きくなっていくのかもしれない。

ジレンマをより複雑にしているのは、山あげ祭は旧六町の祭であるという意識が今なお根強く残っていることである。そうした意識は旧六町間の競い合いとして表れているが、祭における集団間の競争は珍しくなく、むしろ祭を継承していく原動力になる(福島、2003)。それより祭のみならずふだんの生活にまで及んでいるという祭の主導者とそうでない人たちの対立の方が深刻であろう。祭を活気あるものとしているのは技能や熱意をもつ一部の住民であり(三隅、1969)、関わり方や立場によって祭は全く異なる様相をみせる(森田、

1990) ことを考えると、こうした対立が生まれるのも自然の成り行きともいえる。しかしながら、担い手不足が深刻化する現在にあっては乗り越えるべき課題であることは確かである。

旧六町の祭として伝統としきたり、誇りを守りながら旧六町のみで運営を続けるのか。それとも那須烏山市にさらなる財政的支援を期待し、また広く市民に運営を開放し、名実ともに那須烏山市の祭として継承していくのか。それとも旧六町の祭としての伝統としきたり、誇りを守りつつも財政的支援や運営については那須烏山市や市民の理解と支援をあおぐのか——。今後どのようにジレンマを埋めていくかが注目される。

以上は山あげ祭ならではのジレンマだが、伝統と合理化の両立という全国の祭に共通するであろうジレンマも浮かび上がった。宗教行事としての祭と観光資源としての祭、車社会に路上で祭を行うこと、高齢者独居世帯増加のなかでの祭典費捻出、少子化・若者の流出と担い手の育成等々、伝統と誇りを守りつつどう合理化していくのか、多くの人たちが真剣に考えをめぐらしていることが回答の数、内容の多様さに表れていた。

謝辞

調査にご協力いただきました那須烏山市烏山地区旧六町および旧屋敷町の皆様に篤く御礼申し上げます。手書きでびっしりと書かれた回答から、地元の人たちにとっての山あげ祭の大きさが伝わってきました。山あげ祭が今後も末永く受け継がれていくことをこころよりお祈り致しております。また調査員の氏名を記し、その頑張りに感謝申し上げます。インタビュー、祭準備・当日参与観察：薄井美里さん、大久保裕子さん、片桐剛史さん、加藤敦朗さん、郷間優子さん、齋藤寛泰さん、坂本裕子さん、笹沼正治さん、五月女彩香さん、高瀬正広さん、田代さやかさん、津布久雄介さん、平野博昭さん、松田泰臣さん、武藤利彦さん、森谷昌弘さん。質問紙調査：宇賀神愛さん、宇塚沙織さん、小太刀舞さん、佐藤美幸さん、高橋勇吾さん。

文献

- 烏山町歴史年表編集委員会編 1986 烏山町歴史年表 烏山町
- 小松和彦 1999 総説芸術と娯楽の民俗 小松和彦・野本寛一(編) 講座日本の民俗学8 芸術と娯楽の民俗 雄山閣出版 Pp.3-21
- 福島明子 2003 高千穂夜神楽の健康心理学的研究——神と人のヘルスケア・システム 風間書房
- 福島明子 2008 山あげ祭のイメージと心理的機能——当番町、時代、祭への関与に着目して 作新学院大学人間文化学部紀要、6、1-20
- 三隅治雄 1969 民俗芸能の生き方——交流、伝播そして変容 伝統芸術の会(編) 伝統と現代第7巻 学藝書院 Pp.172-212
- 森田三郎 1990 祭りの文化人類学 世界思想社
- 渡辺康代 1999 近世城下町における祭礼形態の変容——下野国那須烏山を事例として 地理学評論、75 A -7、423-443
- 山路興造 1999 「芸能」の機能と類型 小松和彦・野本寛一(編) 講座日本の民俗学8 芸術と娯楽の民俗 雄山閣出版 Pp.95-109

(2007年12月1日受理)